

2026年のAI展望：『賢さ』から『実用性』への転換点



AI研究者・今井翔太氏の洞察に基づく2025年の総括と未来予測

2026年を読み解く3つの重要ポイント

1



2025年のパラドックス

AIの性能は飛躍的に向上したが、その「賢さ」と我々の「便利さ」のギャップが顕在化。業界は「研究者が壁を理解した年」として大きな反省点に直面した。

2



2026年の二大フロンティア

競争の主戦場は「動画生成AI」と、科学的発見を加速する「AI for Science」へとシフトする。これらが次の「チャットGPTモーメント」を引き起こす。

3



評価軸の転換

学術的なベンチマーク競争から、実経済への貢献度（GDP-Evalなど）を測る「実用性」重視のフェーズへ。AI研究は「後半戦」に突入する。

2025年 振り返り： AIが「壁」を意識した一年

AI研究者・今井翔太氏：「今年は進展速度としてはかなりすごかったんですけど、AIの研究者が壁を理解した年でもあったと思います。」

テーマ1：AIバブルの熱狂とインフラ投資競争



市場の衝撃

1月、コスト効率の良いモデル「DeepSeek」が登場。NVIDIAの株価が一時的に下落するなど、経済的なインパクトが市場の注目を一気に集めた。
（「ディープシークショック以上のやつはまだなくて」）



巨額インフラ投資

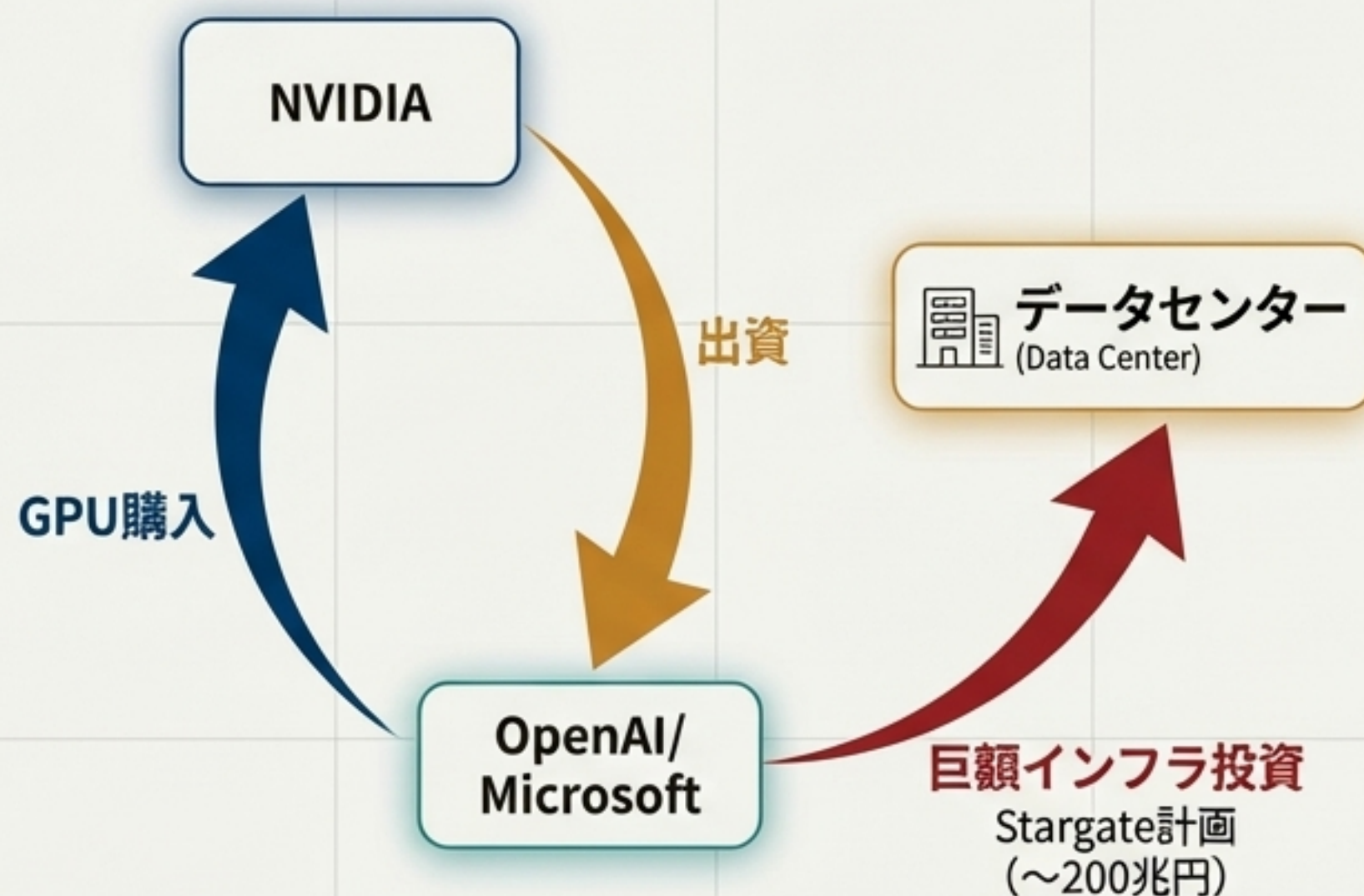
OpenAI/Microsoftの「Stargate」計画（約200兆円規模の投資計画発表）など、インフラへの投資が異常なレベルに達した。



循環取引

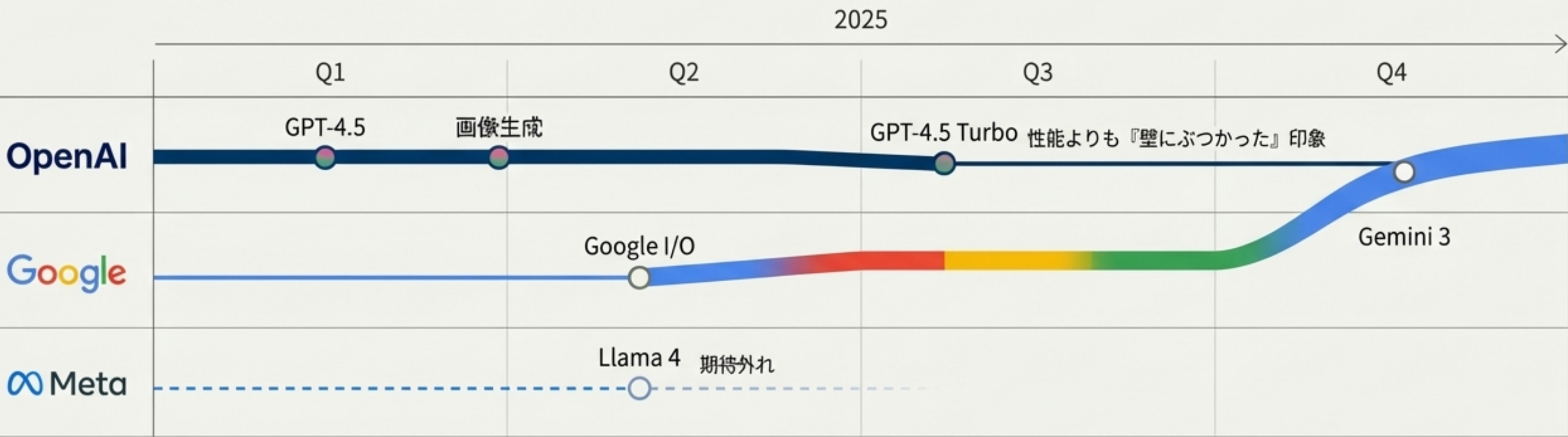
NVIDIAがOpenAIに出資し、その資金でOpenAIがNVIDIAのGPUを購入するといった、エコシステム内での資金循環が話題となった。

Cyclical Investment



テーマ2：OpenAIの失速とGoogleの猛追

2025年を通じて、AIの覇権争いは劇的に変化した。



序盤 (Q1-Q2):
OpenAIがGPT-4.5や画像生成で話題をリードするも、性能面での「壁」が囁かれ始める。MetaのLlama 4は期待外れに終わる。

中盤 (Q2-Q3):
5月のGoogle I/Oを境にGoogleの勢いが増し始める。8月のGPT-4.5 Turboの発表は、性能よりも「OpenAIが壁にぶつかった」という印象を市場に与えた。

終盤 (Q4):
11月に発表されたGoogleの「Gemini 3」が決定打に。性能とマルチモーダル能力でOpenAIを凌駕し、市場の評価を一変させた。

最新モデル比較：GPT-5.2 vs. Gemini 3

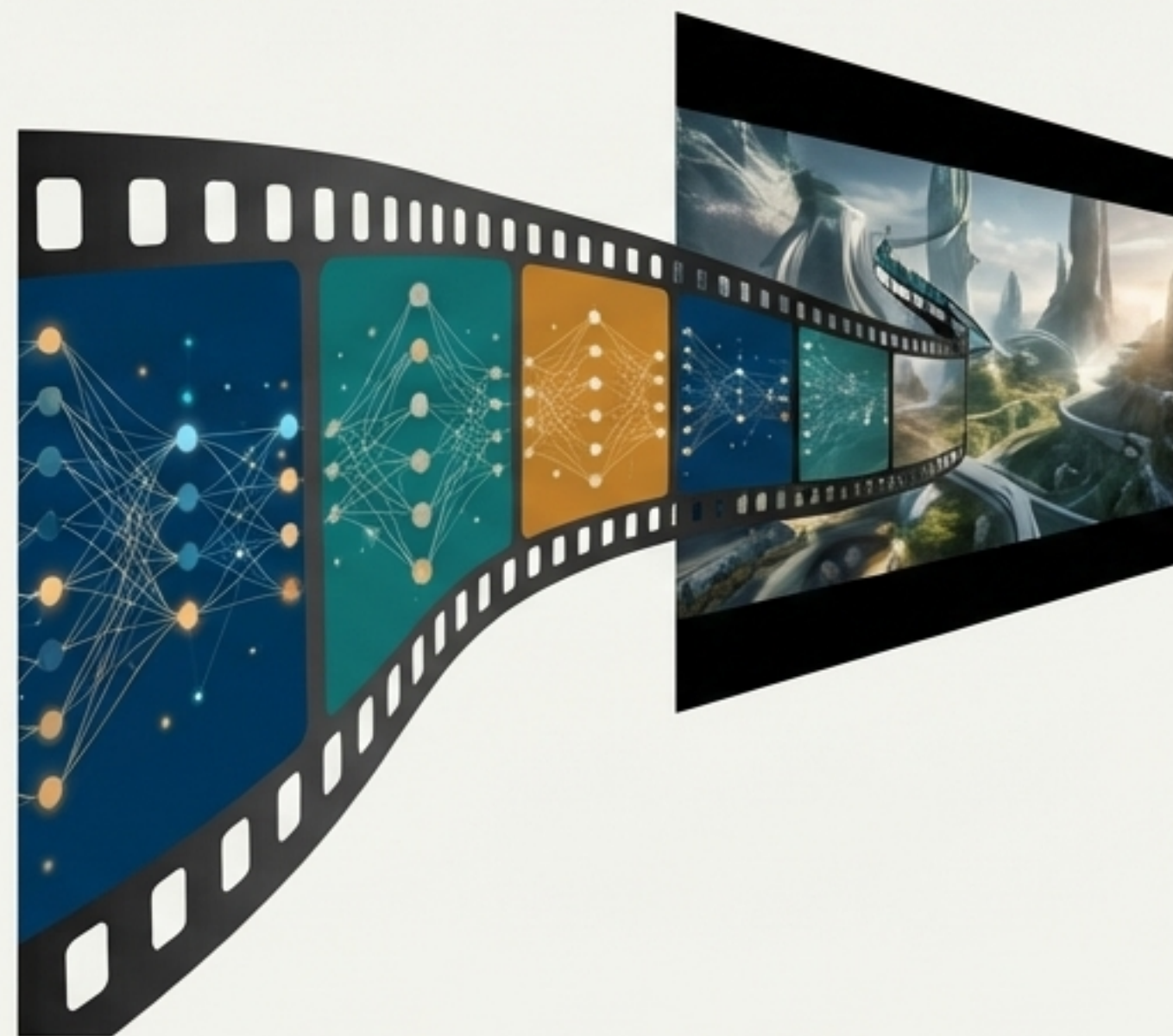
性能競争は依然として熾烈だが、評価軸は「実用性」へ

Benchmark	Winner	Analysis
SWE-bench (コーディング)	 GPT-5.2	コーディング特化を謳うAnthropicのClaudeに打撃を与える結果に。
VendingBench (ビジネスシミュレーション)	 Gemini 3	他の性能指標とは独立したタスクであり、Geminiのユニークな能力を示す。
GDP-Eval (経済貢献タスク)	 GPT-5.2	OpenAIが「仕事での実用性」をアピールするために開発した新指標。
NanoBanana (画像生成)	 Gemini 3	テキストと画像を統合した基盤モデルであり、「根本的なアーキテクチャで優位」。OpenAIが追いつくにはGPT-6レベルの刷新が必要。



2026年 展望： 『驚き』から『貢献』のフェーズへ

最重要テーマ① 動画生成AI：「チャットGPTモーメント」の再来



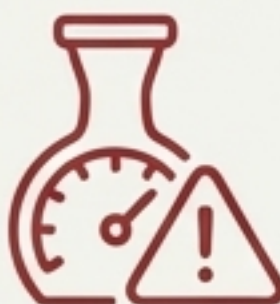
技術的ブレークスルー

動画学習モデルが、切り抜き、編集、生成など、あらゆる画像・動画タスクをこなす万能モデルになる可能性。テキスト生成が世界を変えたようなインパクトが期待される。



市場へのインパクト

2022年のChatGPT登場時と同様の「モーメント」が、動画・画像領域で起きると予測される。



最大のボトルネック

圧倒的な計算資源不足。Googleですらリソース制限に苦慮しており、凄まじいインフラ投資があっても「むしろあれだけやっても足りないぐらい」なのが現状。インフラ整備が普及の鍵を握る。

最重要テーマ② AI for Science：現代の「マンハッタン計画」



研究の自動化 (Automation of Research)

AIが仮説立案、実験、論文執筆までを担う「AI科学者」が現実味を帯びる。Sam Altmanは「2028年に研究は自動化される」と予測。



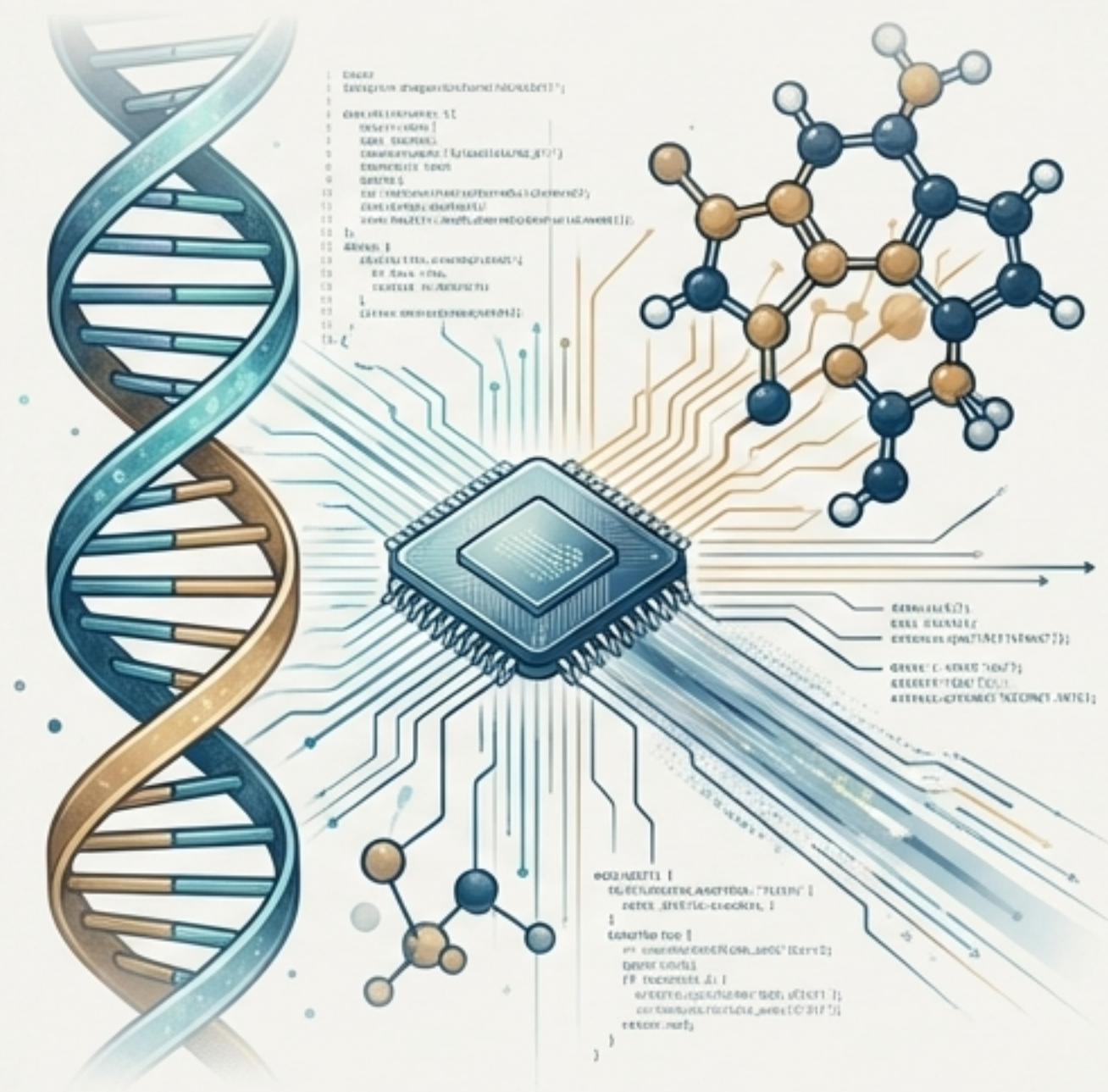
米国の国家戦略 (U.S. National Strategy)

米国は「ジェネシス・ミッション」として国家レベルで推進。エネルギー省や主要企業が連携する様は「現代のマンハッタン計画」。



日本の挑戦 (Japan's Challenge)

日本も370億円規模の予算を投じ、ライフサイエンスや材料サイエンスなど、オープンデータが少ない分野での基盤モデル開発を目指す。



U.S. DEPARTMENT OF
ENERGY



市場の主戦場へ：エンタープライズAIという最優先事項

収益とデータの源泉（Source of Revenue and Data）：インターネット上のオープンなデータは枯渇。企業のクローズドな作業データ（マウスの動きやクリック等）が、次の性能向上と収益化の鍵となる。

先行プレイヤー

Google (Workspace) & Microsoft (Office)

既存のプラットフォームを保有しており、圧倒的に有利なポジションにいる。



挑戦者

OpenAI



特化戦略

Anthropic (Claude)

「現場での信頼性が最も高い」という評判を武器に、コーディングや特定業務での高い安定性を求めるユーザー層に深く食い込む戦略で巨大プラットフォームに対抗する。



研究者が直面した「壁」：AIは賢くなりすぎたのか？

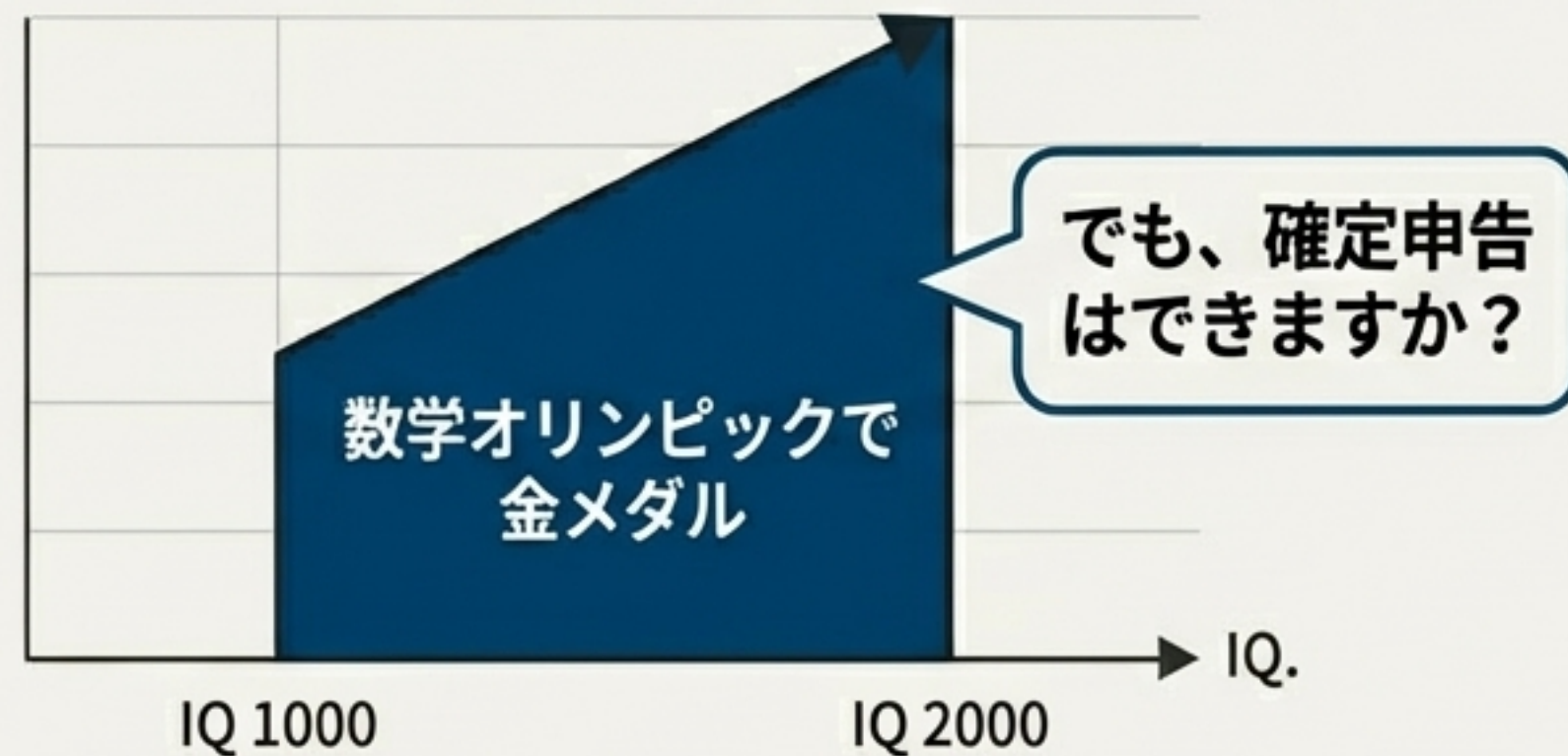
「賢さ与我々にとっての便利さが同じものなのか
どうなのかというのを反省し始めました。」

—— 今井翔太

過去 (The Past)



現在 (The Present)



AI研究の後半戦：「賢さ」から「価値」への評価軸転換



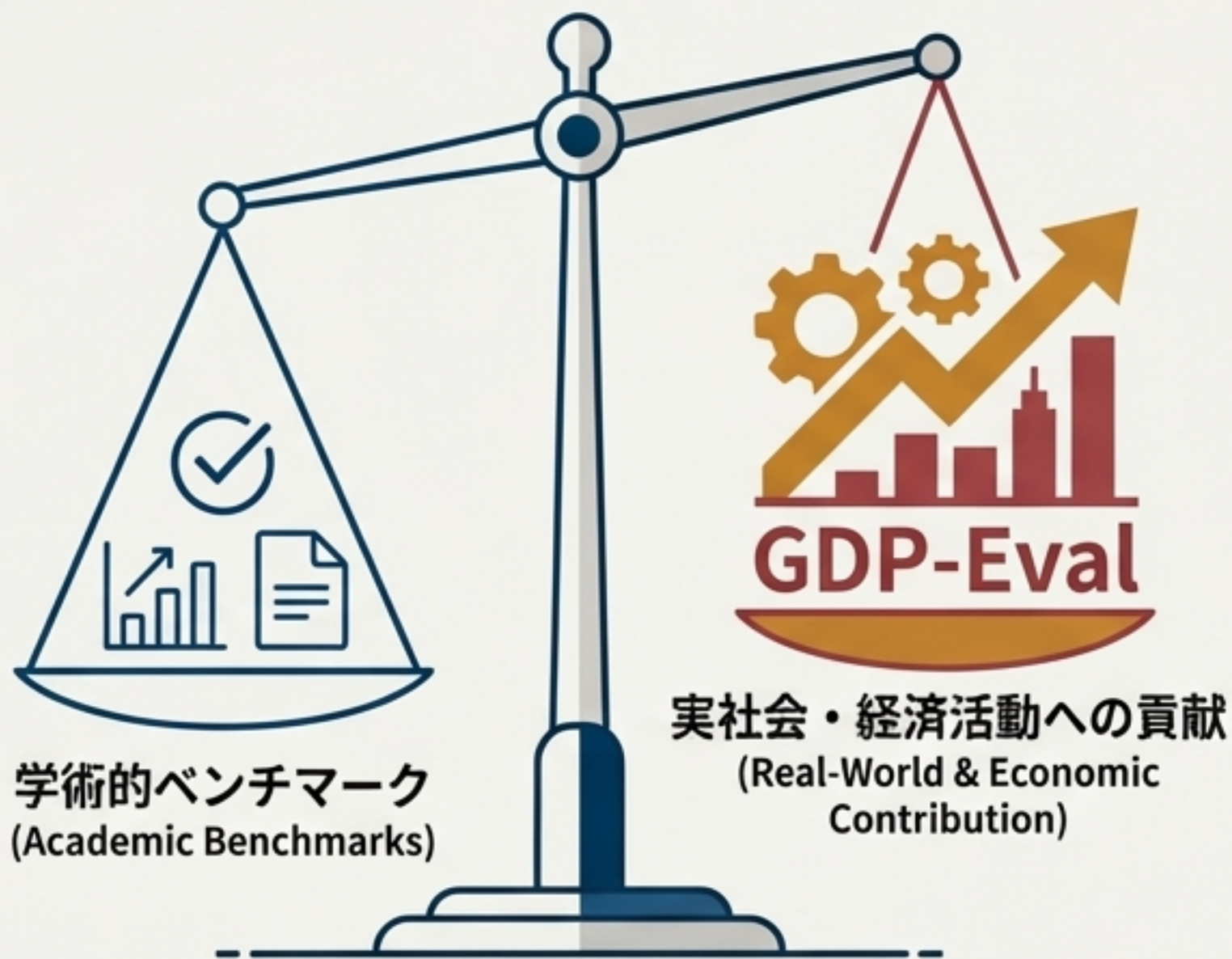
新たな評価軸

GDP-Evalのように、学術的なスコアだけでなく、実社会・経済活動への貢献度を測るベンチマークが重要になる。



学習プロセスの革新

明確な評価基準（勝敗など）がない生成AIの学習は限界に。自己対戦で強くなったAlphaGoのように、内部的な評価指標を持ち、自律的に改善する仕組みが求められる。



AI研究の後半戦

OpenAIの研究者が提唱するように、研究の焦点はアルゴリズムで賢くすることから、正しいゴールを設定し、それを効率的に達成させるフェーズへと移行する。

2026年の注目プレイヤー：各社の戦略と課題



戦略 (Strategy)

- GPT-5.2の事務処理能力（GDP-Eval）を武器にエンタープライズ市場で「実用性」を証明する。

課題 (Challenge)

- Googleの猛追と、動画生成など新フロンティアでのキャッチアップ。



戦略 (Strategy)

- Gemini 3のマルチモーダル能力と既存プラットフォーム（Workspace）を武器に全方位で攻勢をかける。

課題 (Challenge)

- 動画生成やAI for Scienceで必要となる膨大な計算資源の確保と、その効率的な配分。



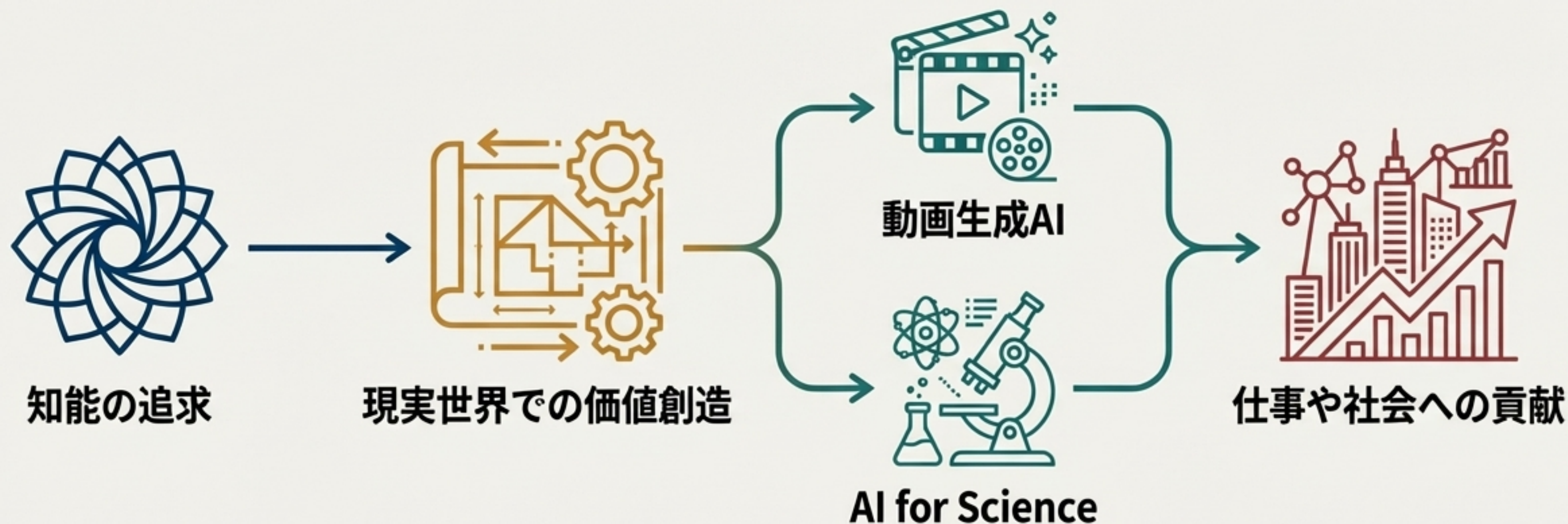
戦略 (Strategy)

- 現場での高い信頼性を誇るClaudeを武器に、コーディング・エンタープライズに特化し、特定の顧客層を固める。

課題 (Challenge)

- 巨大モデルの圧倒的な「力技」（スケーリング）に飲み込まれないか。

結論：2026年、AIは「驚き」から「貢献」のフェーズへ



1. AI開発は、単なる知能の追求から、**現実世界での価値創造**という明確な目的を持つ段階に進化した。
2. **動画生成AI**と**AI for Science**は、その価値創造を象徴するキラーアプリケーションとなる可能性を秘める。
3. 競争の勝敗を分けるのは、もはやベンチマークのスコアではなく、「**いかに我々の仕事や社会に貢献できるか**」という、より本質的な問いへの答えとなる。

資料について



本資料は、YouTubeチャンネル「TBS CROSS DIG with Bloomberg」の動画
『【“数学オリンピック優勝”のAIは便利なのか】今井翔太「AIは賢くなり過ぎた」...』
におけるAI研究者・今井翔太氏の発言を基に作成されました。